



2020年6月30日発行

6月議会通告だらだら編2

6月議会一般質問の通告の続きです。だらだらですみません。

Covid19の影響で休校が続き、市の施設も使用できなくなり、子ども達が運動できる場所が無くなりました。運動したい子ども達は自然に公園に行きます。ところが、公園では「ボール遊び」が禁止されている為、サッカーボールでリフティングしているだけで、親子でバトミントンのシャトルを使ってトスバッティングしているだけで、**警察に通報されるようなことが起きています。**公園は**近隣住民の庭ではありません。**子ども達も含めた全新座市民のものです。こういう時こそ安全な場所で子ども達に運動をして欲しいと思いますが、いかがでしょうか。

「ボール遊び禁止」という貼り紙を外して、時間でボール遊びができるようにはできませんか。子育て世代を呼び込む為にも新座の子ども達が伸び伸び遊べる公園をもっともっと増やしてください。

***コミュニケーション能力がない大人が増えてきました。**直ぐに「警察」すぐに「市役所」に通報する人たちが増えてきたのです。やっている内容が危険だから「通報」するのならわかるのですが何も危険ではないのに「張り紙にボール遊びは禁止と書いてあるだろう」という屁理屈です。その張り紙こそが「問題」だということに気づいてないのです。

公園はみんなのものです。お年寄りや幼児だけのものではありません。

小学生以上はダメとか、中学生以上はダメとか、括る場所ではありません。それが誰であっても「危険なこと」をしてはいけないのだし、「人に迷惑がかかるようなこと」は老人だって、やってはいけないのです。**公園から子どもたちを締め出すような市に未来はありません。**みなさんはどう思いますか。



大学1年、19歳の僕です。東北大との対抗戦の後の写真です。右端の長髪が僕です。

たかやんのプロフィール



1954年東京生まれ
本名たかむらともや
新宿区立西戸山中
石神井高、北海道大
庭球部卒。小さい頃
絶対になりたくない
と思っていた仕事、

学校の先生、政治家、PTA会長。悪ガキ過ぎて先生にだけはなってはいけないと思っていた。大学3年の冬、突然「教師になる」と決め、そこから単位を取り始める。

猛勉強し、採用試験に合格するも大学の単位が取れず…先生に「あの連絡船に乗らないと…子どもたちが待っているんです！」と訴え、何とか卒業させて貰う。

そして、当時新設校だった五中に赴任。日本で一人新任で3年生の担任となる。その後六中・二中で多くの子どもたちと出会って21年後に退職。今は石神の自宅で塾をやって、主に中高生たちと日々学んでいる。これがまた楽しい訳で……。

写真は小学校1年生の時、息子と同級生だったSちゃん。駅立ちでこの子たちと会える日が早く戻ってきて欲しい。

③ 白杖

この6月議会で僕は「市民と語る会」の控室から議場まで、何度も目隠しをして白杖で歩く練習をしました。妹(孝子)の白杖を借りて練習をしたのです。最初の内はなかなか上手に歩けませんでした。間違っつたり、迷ったり…。でも、練習している内に、なんとなく「壁の圧力」を感じたり、空間の広さを感じたりできるようになっていきました。

そして、何とんでも点字ブロックの有難さを体感できたのです。妹のお陰で、目が見えるのに「見えないものがある」こと、目が見えなくても「見えるものがある」ことを学びました。



写真は控室前の廊下を白杖で歩く僕です。後ろを歩いているのが妹の孝子。妹が凄いのは目が見えないのに、僕の後ろを歩き、僕にアドバイスができることです。「左右の壁を感じて」とか、「右側に広い空間を感じられるかな」とか……

そして、気が付いたのです。このコロナ禍で大変な時期に、目が見えない人達は僕らの何十倍も大変だということに……。マスクをしていないだけで「警察」が出動する世の中になりました。本当に嫌な世の中です。

暑い中、目が見えない状態でマスクをすることで、感覚が少し鈍ってしまうかも知れません。誰かの目が必要な時に、誰かの肩や腕が必要な時になかなか「お願いします」と言えない環境になってきている気がします。

白杖を持って歩いている方を見かけたら、立ち止まっている時に躊躇することなく、「どちらへ行こうとしていますか」「お手伝いしましょうか」と声を掛けたいものです。そして、そっと肩か腕をかしたいものです。

③ 師匠より兄貴がいい

昔々、職員室に入る時、「失礼します！」と言わないと怒る先生がいました。職員室の廊下から「たかやん！」と呼ぶ生徒がいると、「その呼び方はなんだ！」と怒る先生がいました。「先生と生徒の間には線を引かなきゃ駄目だ！」という主張が分からない訳ではありません。そうしておいた方が、自分がちょっと偉い気分で見られるからです。

でも、**教育というものは、教師からみて「楽」で「気持ちいい」ことがいいこと**ではなく、**子ども達からみて、「楽しくて」「充実した」ものでなければなりません。**

確かに人生に「師匠」はいた方がいい。でも「俺は師匠だ」「私は師匠よ」と言うのはどうなのでしょう。児童・生徒の前で「校長先生は」と自分を一人称で呼ぶ「校長」を見ていると、恥ずかしくなるのは僕だけでしょうか。世の中の「社長」が自分のことを「社長様は」と呼んだらおかしいでしょう。同じことです。あなたが「師匠」かどうかを決めるのはあなたではなく子ども達であるということです。特に若い先生は「師匠」よりも「兄貴」の方がいいと思います。若いということは、中学生の親の年代にはなっていない訳です。「親」や「師匠」になるのは難しいし、ちょっと背伸びをしないといけません。その点「兄貴」「姉貴」は難しくありません。ちょっと前までは自分も中学生だったので、「その気持ち分かるなあ」「その気持ち分かるけどね」と不安な子ども達に寄り添うことができるのです。「俺もそうだった」「私はもっと酷かった」「僕も不安でしょうがなかったよ」「わたしも苛められたことある」「俺も勉強苦手だったんだ」「親ってそんなもんだよ」とまあ、軽い気持ちで寄り添えるのです。子ども達は頭ごなしの「師匠」や「親」からの意見よりも、自分に身近な「兄貴」や「姉貴」に安心するのではないのでしょうか。

僕が21年間、担任をやってこれたのは、常に「兄貴」だったからかも知れません。

教師を目指す人・若い先生へのメッセージ 第809弾！から……

